



空知の話、どこまでがファンタジー？

岩崎真紀一文
text: Maki Iwasaki



2015年9月に札幌座で上演された『空知る夏の幻想曲(ファンタジー)』の、道産小麦を調理して味わうシーン 撮影:高橋克己

ガッカリしたので書かすにはいられない。北海道を代表する劇団の一つである札幌座のチーフディレクター・斎藤歩の、4年ぶりの新作『空知る夏の幻想曲(ファンタジー)』についてだ。

斎藤はこれまで、お米、蕎麦、鯉、蟹などの道産食材を、舞台上で調理・飲食する芝居を作ってきた。新作のテーマは小麦、そして石炭(炭鉱)。劇作のために空知でキャンプをし、小麦農家や炭鉱を訪ねたと聞いて、斎藤が土地の物語をどのように捉えて料理するのか、観劇を楽しみにしていた。

設定は炭坑内。小麦を作っている農業青年が、小麦畑に置かれた謎の手紙の願いに応え、自分が作った小麦粉を持ってやってくるころからスタートする。ハチャメチャな言葉を話す鉱夫や突然のつるし上げなど、冒頭から「つくりごとですよ」というサインを出す一方、現実の空知の銘菓や名物、地名の由来、空知発祥の『北海盆唄』、産炭地としての現状やエネルギー事情などが、ドタバタ喜劇の中で紹介されていく。終盤には小麦粉の調理シーン。小麦品種の特性に合わせてうどんを茹でパンを焼いて味わい、ちょっとよい雰囲気になり、ラストは「やはり幻想？」という形に落ちる。

空知を紹介するという意味では、とてもよくできた作品と思う。縁のある人は土地の風物の登場に喜び、知らない人は「へえ、そうなんだ」と学ぶだろう。けれど物語自体は「空知に底流するものに触れている」というよりも「空知の情報に乗せるフレーム」であるように感じられた。

その最大の理由は、長く農業の現場を取材してきた私には「中心人物である農業青年の設定そのものが幻想に感じられた」という点にある。

例えば、「自分たちの」ではなく「自分の畑の麦で作った」と言える小麦粉を生産する意欲的な農業青年が、その小麦粉を調理して食べたことがない、ということがあり得るだろうか。しばしば小麦畑で1時間もぼーっと立っている(考えごとを観察もしていない)という余裕を持っているだろうか。何より、「祖先が開拓者かどうかを知らない」、つまり畑の履歴を知らないなんてことがあるだろうか。

「まあまあ、ファンタジーなんだからさ」と言われそうだが、空知の風物・諸事情をこれだけ盛り込んでおいて、農業者像が幻想だというのは残念至極、農業の苦労を語るセリフも空しい。

そんなわけで、私はガッカリしたのだけれど、終演時には割れんばかりの拍手が起り、SNSやブログでのレビューはどれも好意的だった。実際に「炭鉱事故を思い出して胸が詰まった、いい作品だった」としみじみと口にしていた方もいた。

私はいわば、北海道農業オタクだ。農業には、ロマンはあってもファンタジーはないと感じている。だから今回の作品に馴染めなかったのかもしれない。